

立命館大学
国際平和
ミュージアム
平和教育研究
センター



映画 企画

『移住四十一年目のビデオレター グアタパラ編』

『京 サンパウロ/ 移民画家トミエ・オオタケ八十路の華』

トーク

ブラジル移民の戦争経験の継承

話者 岡村 淳 監督

聞き手 番匠 健一 氏 (立命館大学国際平和
ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー)

2019年

12月4日(水)

16:30~19:30

国際平和ミュージアム

2階会議室

参加無料 事前申込不要

市バス12・15・50・51・52・55・59・M1、JR
バス「立命館大学前」下車、徒歩5分

市バス204・205「わら天神前」下車、
徒歩10分



『移住四十一年目のビデオレター グアタパラ編』

製作・構成・撮影・編集・報告：岡村 淳 2003年制作 / 73分

1962年に南米に向かった移民船あるぜんちな丸第12次航の乗船者のその後を訪ねるシリーズ第二弾。ブラジル・サンパウロ州の内陸にあるグアタパラ移住地に暮らす小島忠雄さん一家の歩みと今を紹介する。小島さんは日本で健康食品としてブームを呼んでいる姫マツタケ(アガリクス)を栽培している。小島さんは日本への出稼ぎブームが始まった時、パイオニアとして祖国にUターンした経験を持っている。同じ移民船で移住した夫人の智子さんと両親、そして日本で暮らす小島さんの子供と孫を訪ね、国境を超えてしまった家族の絆を見つめていく。



企画趣旨

戦前の移民政策で日本帝国圏内に移住した人が、戦後も海外移民としてブラジルに渡るケースは多い。グアタパラ移住地は、満州開拓に関わった官僚が戦後もう一度開拓を行った場所である。南米移民のその後を映像で追いつける岡村淳監督を招き、①戦前の京都からブラジル移民と②戦後のブラジル移民をあつかった作品をそれぞれ上映し、日本とは異なる場所での戦争経験の継承を考える機会をつくる。

岡村淳監督プロフィール

1958年11月7日生まれ。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業。考古学・民俗学・人類学などから、現代日本文化に潜む縄文文化の痕跡を研究。日本映像記録センター(映像記録)にて牛山純一にテレビ・ドキュメンタリーの作法を学ぶ。1987年、フリーランスとなり、ブラジルに移住。小型ビデオカメラを用いた単独取材によるドキュメンタリー制作に着手し、記録映像作家として1997年より自主制作によるドキュメンタリーづくりを始める。ブラジルの日本人移民、社会・環境問題をテーマとした作品の制作を継続中。自主制作の代表作に『郷愁は夢のなかで』(1998年)、『ブラジルの土に生きて』(2000年)などブラジル無縁仏三部作、『あもーる あもれいら』三部作(2007-2012年)、『橋本梧郎と水底の滝』シリーズ(2011年～)、『リオ フクシマ』(2012年)、『五月の狂詩曲』(2015年)など、そして著書に『忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』(2013年)がある。



『京 サンパウロ/移民画家トミエ・オオタケ 八十路の華』

製作・構成・撮影・編集・語り：岡村淳、2013年製作、
撮影 2000年-2001年 / 51分

20世紀最後の年。岡村監督は当時、87歳になるブラジルの大御所アーティスト、トミエ・オオタケさんの撮影を引き受けた。京都出身のトミエさんは1930年代にブラジルに渡って結婚、二児を設けてから絵画を始めた。以降、ブラジルの抽象画家のトップに登りつめて、なおも新たな試みにチャレンジしていた。サンパウロでのトミエさんの活動に寄り添った岡村監督は、トミエさんの心象風景を求め秋の京都の映像行脚に出る。